令和８年度９月試験研究業務月報
試験研究課題：令和８年度「祝２号」「ZR1」一発型肥料試験（全農委託）

情　報

京都府産酒米現地検討会を開催

９月 11 日（金）、当センターにおいて、京都府産酒米現地検討会を開催しました。本検討会は、酒米の生産や酒造に関わる関係機関が一堂に会し、各地域における酒米の栽培状況や普及機関・試験研究機関の取組などを共有することを目的として開催しました。

当日は、関係機関から計 27 名が参加しました。当センターからは酒米栽培試験の実施状況について、各農業改良普及センターからは各地域における酒米の栽培状況について報告を行いました。続いて、参加者が当センターの酒米試験ほ場を見学しました。酒造関係者からは、「困難な気象条件の中でも酒米が順調に育っており、心強く感じている。」との声が聞かれました。



検討会の様子



酒米試験ほ場見学の様子

農林センター

情　報

「病害虫発生定期巡回調査」同行研修の実施

病害虫防除所では、月 1 回発行している「病害虫発生予察情報」の作成に必要な基礎資料を得るため、2 月から 11 月にかけて「病害虫発生定期巡回調査」を実施しています。7 月から 9 月の巡回調査では、普及指導員等を対象に、病害虫発生調査の基本的な手法の習得と、この時期に発生する病害虫への理解を深めることを目的として、「同行研修」を実施しています。

9 月の研修では、水稲、豆類、果樹、野菜、チャを対象に、実際のほ場を巡回しながら病害虫の見分け方や調査方法について指導しました。また、病害虫発生予察情報の作成方法や、近年発生が増加している病害虫について情報交換を行い、実践的な知識の共有を図りました。

参加者からは、「実際の調査に同行することで、病害虫の発生状況を現場で確認するとともに、病害虫の見分け方についても理解を深めることができ、今後の業務に生かせる貴重な経験となった」などの感想が寄せられました。



水稲の調査手法を指導



ダイコンの調査手法を指導

農林センター（病害虫防除所）

令和 8 年度 9 月試験研究業務月報
業務課題：ブナ科種子豊凶調査
モニタリング調査：ツキノワグマ出没に係る調査

情　報

ドングリは凶作、クマ出没に厳重注意！

当センターでは、秋のツキノワグマ（以下、クマ）の出没を予測する基礎データを得るため、毎年、クマ生息地域におけるブナ科種子の結実状況（ドングリの豊凶）をモニタリングしています。

本年も、8 月後半から 9 月前半にかけて、府内の森林計 39 箇所を、目視により調査しました。その結果から本年は、「ブナは並作であるものの、コナラ・ミズナラ・イヌブナが凶作であり、全体として凶作」と推測しました。

そのため、今秋季は昨年以上のクマ出没が予想され、厳重に注意する必要があります。今後も、エサ資源としてのブナ科種子の豊凶調査を継続し、クマの出没状況との因果関係を調べます。

ドングリの豊凶調査の結果

樹　種	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8
ブナ	凶	並	凶	凶	凶	豊	凶	凶	凶	凶	並
イヌブナ	並	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶	凶
ミズナラ	凶	並	並	凶	並	並	並	並	凶	並	凶
コナラ	並	並	並	凶	凶	並	凶	並	凶	並	凶
府全体	並	並	並	凶	凶	並	凶	並	凶	凶	凶

↑大量出没年

注：1. 豊凶レベル：調査木をレベル0（堅果がない）～レベル5（全体にたくさんついている）で数値化したものを樹種毎に平均化し、さらに 4 樹種を加重平均したもの
2. 判定基準：樹種毎に凶作（凶）＜1.5≦並作（並）＜3.5≦豊作（豊）で判定

農 林 センター（ 森 林 技 術 センター）

情　報

ブドウ新品種の導入に向けた試食会

9 月 24 日（木）に京都やましろブドウ研究会及び山城南農業改良普及センター、9 月 25 日（金）には勧修寺ブドウ部会及び京都乙訓農業改良普及センターが開催したブドウ新品種「サニーハート」の試食会に参加し、果実及び生育データの提供を行いました。

「サニーハート」は、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構が育成した赤系統のブドウで、高糖度で皮ごと食べることができ、今後の市場拡大が見込まれる有望品種です。試食会では、生産者らと意見交換を行い「今は皮ごと食べられる事が一般的となる中で、香りが良いサニーハートは他の品種と差別化できる」、「赤系統なので日当たりと日焼けに留意する必要がある」、「直売所では大粒が主流なので房を大きくする際の知見が欲しい」といった今後の試験研究の参考となる意見を得ることができました。

当センターでは、今後も生産者への情報提供や意見交換を行い、農業改良普及センターと共に京都府産果物の生産振興に向けた取組を進めていきます。



栽培特性を説明している様子



試食会の様子

農林センター（丹後農業研究所）

情　報

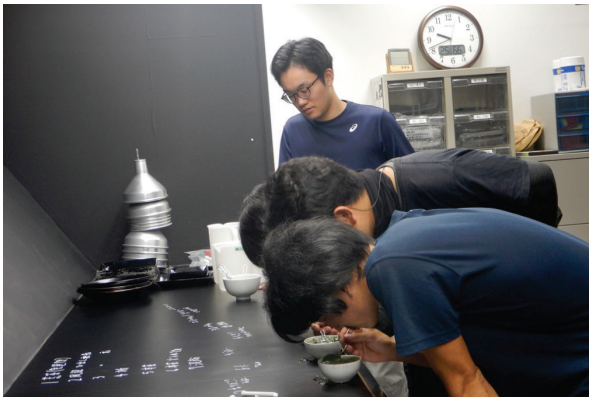
研修生・学舎生の現地実習、審査実習を実施

令和 8 年度の茶業技術研修生 2 名、宇治茶実践型学舎生 2 名が、様々な立地の茶園を知るため山城地域の現地茶園において除草実習を行いました。研修生らは、次世代の発生を抑制するために、茶園のうねや茶樹の樹冠面まで伸びた雑草を手作業で慎重に引き抜き、珠芽（むかご）を形成するつる性植物は茶園外に処分をしました。

また、研修生らは当所のてん茶の仕立て研修を行った際に、仕立て途中の茶を採取し、審査することで、香りや色、味などの品質の変化を知り、仕立てにより香味を整える意図を理解しました。仕立て途中のものを採取できる研究所ならではの研修は、今後の茶業経営に役立つものになります。



茶株をかき分けて雑草を除去



試料茶の特徴を審査台に書きながら審査

農林センター（茶業研究所）

令和 8 年度 9 月試験研究業務月報

情　報

「静岡県経済連てん茶品質評価研修会」に講師として参加

9 月 1 日(火)に JA 全農京都茶市場において、㈱静岡茶市場及び静岡県経済連の職員等 12 名を対象に、静岡県及び京都府産のてん茶を用いた品質評価研修が開催され、当所職員が品質を見極める際のポイントについて解説しました。

近年、国内外における抹茶需要が高まる中、てん茶の生産や品質向上が急速に進む海外産地との競争に負けないよう、国内産地間で品質評価の考え方を共有し、国内産てん茶の品質向上につなげることを目的に研修が実施されました。

当日は品質評価に加え、てん茶機の導入状況や茶園の被覆方法などについて活発な質疑応答が行われ、静岡県と京都府の栽培・製茶・流通の違いについても情報交換を行いました。

今回の研修を通じて、静岡県産てん茶の実態を知ることで、京都府産てん茶について改めて考えることが出来ました。当所では、今後も他産地との情報交換を通じて、国内産てん茶の品質向上と生産技術の発展に取り組んでいきます。



外観審査を解説する講師と
メモをとりながら熱心に聴講する参加者



内質審査(香気)を指導する講師と
実習を受ける参加者

農林センター(茶業研究所)

令和 8 年度 9 月試験研究業務月報

研　究

試験研究課題：緑肥生態系が害虫被害を軽減するメカニズムの解明と利用に向けた技術基盤の構築

黄化症状を引き起こす国内初発生のウイルスからウリ科野菜を守る
～新たなワクチンを利用した総合防除に向けて～

競争的研究資金の研究課題の中間検討を行いました

当センターでは、生物系特定産業技術研究支援センターのオープンイノベーション研究・実用化推進事業において、代表機関として 2 課題の研究に取り組んでいます。

このうち、ウリ科野菜類に感染する新たなウイルス（CABYV）の生態解明と防除に関する課題については東京都内で、緑肥を活用した新しい害虫防除技術に関する課題については秋田県内でそれぞれ中間検討会を開催しました。

両課題とも、今年度のこれまでに得られた研究成果を報告し、国、大学、および民間企業などの研究員、研究コーディネーター、外部アドバイザーなどと活発な意見交換を行いました。

今後は、今年度内に成績検討会を行い、研究成果をフィードバックして、生産現場に即した形の技術開発に努めます。



中間検討会の様子



現地ダイズほ場

生物資源研究センター

研 究

アンモニア水の活用に向け針葉樹バークの堆肥化試験を実施中

当センターでは、縦型密閉堆肥化装置で鶏ふんを堆肥化する際に発生するアンモニア臭の軽減を目的として、昨年度よりアンモニアを水に吸収させて回収する技術の開発を目指しています。この方法では、濃度が約 0.6～2.8%のアンモニア水が回収できることが判明し、臭気低減効果だけでなく、回収物の資源としての活用も期待できます。

一方、針葉樹バークは製材工程で大量に発生する樹皮であり、堆肥化や燃料利用などに活用されています。しかし、針葉樹バークは炭素が多く窒素が少ないため、微生物による分解が進みにくく、堆肥化に長い期間を要することが課題となっています。そこで当センターでは、回収したアンモニア水の活用方法の1つとして、針葉樹バークに吸着させ、窒素分を付加した場合の堆肥化促進効果を検証しています。

今後は、針葉樹バークの分解状況などを調査し、アンモニア水の付加が堆肥化に及ぼす影響を明らかにする予定です。



製材工程で発生した針葉樹バーク



凝縮水を吸着（窒素分を付加）　　水を吸着（慣行）

堆肥化中の針葉樹バーク

畜 産 センター

令和８年度９月試験研究業務月報

情　報

「丹後とり貝」の陸上避暑飼育試験を実施

「丹後とり貝」は、近年の夏の著しい高温化の影響で大半が斃死する事態に陥っています。今後も毎年のように同様の高水温が発生することを考慮し、早急な対策が必要です。

そこで、海洋センターでは今夏、水産庁補助事業を活用し、現場即応を想定した大規模な高水温対策飼育技術の実証試験を実施しました。具体的には、陸上水槽で海水冷却装置又はエアコンにより水温を調温し、生海水（餌となる植物プランクトンを含む）かけ流し又はろ過海水に人工培養餌料を添加しながら、水温が高くなる８月から９月にかけて、トリガイを飼育し、飼育水温とトリガイの成長、生残を追跡しました。その結果、水温が 30℃近い状態でも、飼育装置によりトリガイの成育に適した 25℃付近で維持できることが分かりました。一方で、餌環境や水質に関する課題も明らかになりました。

以上のことから、飼育条件を再検討する必要があるものの、水温を下げる技術としては比較的容易に現場に展開できることが示されました。今回の成果を基に、普及部門と連携しトリガイ養殖地先での陸上避暑飼育の展開に繋げていきます。



飼育装置①
（生海水かけ流し＋海水冷却装置）



飼育装置②
（ろ過海水止水・人工培養餌料＋エアコン）

海洋センター

情　報

農林水産技術交流会を開催しました

当センターでは、京都府立大学、京都府高等学校農業教育研究会と連携し、農林水産業における将来の人材確保・育成を目指した交流会を、9 月 18 日（金）に開催しました。当日は 61 件の研究成果についての紹介が行われ、合計 181 名が参加し、互いの研究内容に関する意見交換等、双方向の技術交流を行いました。

参加者からは「各機関の研究内容を深く知ることが出来た」、「様々な視点からの意見を聞くことができ、自身の研究に対する新たな気づきに繋がった」等の声が聞かれました。

当センターでは、今後も府内の教育機関と連携した研究交流による人材確保・育成に努めます。



181 名が参加し、盛況に開催



研究内容について意見交換を実施

農林水産技術センター（企画連携室）